

基調講演：要旨

介護福祉士養成施設の存在意義の再検討

黒澤貞夫

はじめに

このたびのテーマは、現在の介護福祉士養成施設の課題認識から将来の展望をいかに考えるかである。またその具体的な方向性を示すことにある。まず、養成教育において二つの視点から考える。一つは養成施設において学ぶ学生が自己の職業としての介護福祉が、誇りと責任をもって人々の願いを実現する仕事であることの認識である。二つには介護福祉の学びは、一人の人間として、また専門職として生涯をかけた深遠な学問が存在するかの問いにいかに答えるかである。この両者は相伴う問題である、ここでは後者の問題から考える。

なおつけ加えればこのテーマは、現行の教育カリキュラムをふまえながら、さらに上位の養成課程の創設を念頭に置いている。

【I】介護福祉は人権と価値を基盤とする

1 介護福祉教育において人権をいかに学ぶか

まず人権思想の歴史的源流と今日における意義についてである。はじめに戦後の人権思想を牽引した宮沢俊義の論説を紹介する。「今日多くの国では人権を承認する根拠として、もはや神や自然法だのをもち出す必要はなく、『人間性』と『人間の尊厳』とかによってそれを根拠づけることでじゅうぶんだと考えている。」¹⁾私がこの考えを学んだのは半世紀も前のことであるが、いま改めて教育、実践における意義を問うのである。そして重要なことは人権思想は国家の法制度によって国民の生活を保障していることである。

2 価値について

価値は人権とともに、介護福祉の思想的な基盤となる。価値は多様な視点から論じられている。ここでは介護福祉教育における人間理解の視点から述べる。

私たちの日々の生活・人生は、きまった道を歩んでいるわけではない。運命的なあるいは予期せぬ出来事の中に“あれか、これか”と揺れ動きながらも、行くべき道を選択している。これは一人の人間の主体的な価値判断である。さてこの判断はいかなる意味で価値といえるのだろうか。それは自己実現としての意義を内包しているからであろう。

すべて人は老いを迎え、心身に障害を担って生活している。そこにはさまざまな情感が伴うのである。不安、困惑、絶望、悲哀等である。しかしそこから価値の転換あるいは価値の創造を見出すのである。介護福祉教育において価値のテーマを問い直す必要がある。私は実践の経

験から得た事例を取り上げる。

【Ⅱ】 介護福祉教育における専門性について

専門性とは、ここでは科学的思考と方法をいうとする。一般に科学性とは自然科学のことを意味するという（漠然とした）観念がある。このことは帰するところ要素還元主義による分析・測定・評価等による数的実証性を根拠（エビデンス）とする。一方介護福祉の固有の専門性については、二つの視点がある、一つは生活支援における理念（例示：人間の尊厳）と介護実践（例示：自立に向けた介護）の合目的的に根拠を求める。二つには中村雄二郎の論説からである。「すなわちそれは、一口でいえば、17世紀の＜科学革命＞以後、＜普遍に性＞と＜論理性＞と＜客観性＞という自分の説を論証し得た人を説得するのにきわめて好都合な三つの性質をあわせて手に入れ保持してきたにほかならない。」²⁾ この中村の論説は優れたものである。私は中村の示した自然科学の三つの要素は、介護福祉においても十分に援用することができると考えている。私は介護福祉の固有の専門性を「人間科学」の視点から論証する。

【Ⅲ】 介護福祉士における多職種連携の課題

1 問題の所在

介護福祉士の使命は、高齢者、障害のある人への生活支援である。そして介護サービス利用者のニーズは多面的でありかつ複合的である。したがってこれまでは保健・医療・福祉等サービスが個別に直線的に提供されてきた。これを利用者主体の視点から関係職種が有機的な連携によってニーズの充足を図るものである。これをケアシステムとして考える。

2 ケアシステムの存在理由

ここでフォン・ベルタランフィの一般システム論をあげる。「私たちは現代科学の特徴として、ばらばらな単位が一方むきの因果関係のもとに作用するというこの図式のもとでは不十分であることがわかったことをあげることができよう。つまり科学の分野に、全体性、全体論、有機体的、ゲシュタルトなどの概念が現れてきたのであって、これらすべては、結局たがいに作用しあう要素からなるシステムという目でものを見なければならないことを意味している。」³⁾

3 ケアシステムの機能について

ケアシステムが円滑に機能するためには、各職種が有機的に連携することである。その意味はそれぞれのメンバーが固有の専門性を発揮しながら、共通の理念のもとに有機的に連携することである。すなわち人間の尊厳、自立、主体性の尊重等のである。それは利用者および関係する人々との相互関係を通じて行われる。

【IV】 人間理解と関係性

1 出会いについて

介護関係における人間関係は出会いからである。それは一期一会の出会いであろう。この運命的ともいえる出会いは、人生の歴史のうえでは一瞬のことがかかもしれないが、人生の豊かさをもたらす価値のある出会いであろう。私は仕事を通じて介護を必要とする人々と出会ってきた。その出会いにおける人間関係の恩恵は、介護実践を通じて利用者と私の自己実現の道程である。この関係を成り立たせているのは、生活の場すなわち共同社会における支え合いという環境的土壌においてである。

2 人間理解における情報の整合性

介護福祉士の行う介護が良質なものであるためには、利用者並びに生活状況等の情報を適時、適切に得ておく必要がある。この情報は二つの方法による。一つは対象を要素に分けて客観的に得られた情報である。例えば医学的情報である。二つには利用者の認識・意向、おかれた状況等についての直観あるいは内観等による主観的情報である。介護における人間理解および実践はこの客観的情報と主観的情報の整合性あるいは合一性のうえから考えられている。

【V】 今後の方向性について

本大会のメインテーマは、現在のおかれた諸般の状況からみて多面的であり複合的である。このテーマを山の頂にたとえるならば、その登山口は幾通りもあるであろう。このたびの私の講演はその一歩でありましょう。最後にスイスの碩学ジャン・ピアジェの論説を挙げる。「人間諸科学は科学のうちで、いちばん複雑で、かつ一番困難なものである。しかし、他面、それは科学の円環のなかでめぐまれた特権的地位をしめるものである。それは他の諸科学をつくりあげる主体を研究する学である。」⁴⁾ 私たちは、まず介護福祉士を専門職としての根拠を示して社会において正当な認識を得ることに未来への展望を求めている。

(注)

- 1) 宮沢俊義「憲法 II」有斐閣 昭和46年 78頁
- 2) 中村雄二郎「臨床の知とは何か」岩波書店 2000年 6頁
- 3) フォン・ベルタランフィ：長野 敬・太田邦昌訳「一般システム理論」みすず書房 1988年 42頁
- 4) ジャン・ピアジェ：波多野完治訳「人間科学序説」岩波書店 2000年 149頁

【プロフィール】

黒澤貞夫（くろさわ さだお）

厚生省勤務 国立身体障害者リハビリテーションセンター相談判定課長・指導課長、国立伊東
重度障害者センター所長、東京都豊島区立特別養護老人ホーム施設長、岡山県立大学保健福祉
学部教授、弘前福祉短期大学学長、浦和大学学長等歴任

現在：群馬医療福祉大学大学院特任教授、日本生活支援学会会長

（勤務先名は当時の名称のものである）